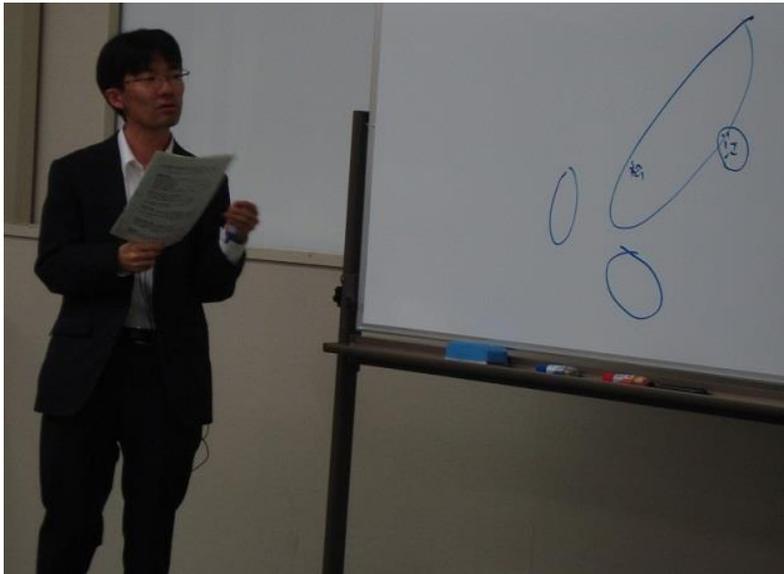


第7回市史講座ミニレポート：平成27年10月17日（土）

松江藩松平家の女性たち

講師：石田俊先生（山口大学人文学部講師）



江戸時代の大名は参勤交代により江戸と国元を一年ごとに往復し、その正室と嫡子は原則として江戸に在住していました。大名の江戸屋敷は江戸城を中心としたその周辺に配置され、将軍や他の大名家との関わり合いは重要なものでした。今回のテーマは「松江藩松平家の女性たち」ということで、こうしたいわばご近所づきあいの中において大きな役割を果たした、松平家5代藩主宣維の正室・天岳院にスポットを当ててお話をしました。

先生は、江戸時代の大名家の奥についてお話をされる前段として、江戸城大奥の法制について話されました。万治2年（1659）と寛文10年（1670）の法制を基に、「女性は政治に関わってはならない」という原則が確立したのが17世紀半ばから後半であると説明されました。武家屋敷の空間構造も政治や儀礼を行う表、主君の日常生活の場としての中奥、そして女性の生活空間としての大奥の三つに分けられており、大名の正室はこの大奥のトップでした。正室の役割は大名の子供、とりわけ嫡男を産み、奥女中とともに育てることでありますが、もう一つ大きな役割は、大名が国元にあって江戸に不在の時等に、公的存在として将軍家・他の大名家・家中と儀礼関係を取り結ぶことでした。さらに、正室が将軍の娘などの関係者であった時は、江戸城大奥の奥女中を通じた将軍との貴重な内証ルートが機能したと話されました。

松平家5代藩主宣維の正室・天岳院（岩姫）は、伏見宮家出身であり、また将軍世嗣家重の正室・比宮の姉でした。大名の妻としては唯一、将軍吉宗から家重と比宮の結納祝儀を贈られたことから、天岳院は将軍家の一族の一人であると認識されていたことがわかると説明されました。

享保16年（1731）、松平宣維が没し、わずか3歳の幸千代（後の6代藩主・宗衍）が家督を相続すると、天岳院は御家の危機に際して松江松平家の「家長」としての役割を果たすことになることと話されました。「徳川実紀」によれば、幸千代の家督相続に際しては、将軍吉宗が老中を通じ、「越前松平一門が申し合わせて諸事を行うように」と申しつけていますが、これは「天岳院の由緒もあるからだ」とはっきり述べています。

また、享保の飢饉の際には、家中の儉約を進めるため、家老たちが天岳院の仰せとして「江戸でも儉約をするので国元の家中でも努めるように」と申し渡しました。しかし、表向（政治）にかかわってはならないという大奥の規制があるにも関わらず、自分に断わりもなくこのようなことをした家老たちに対し、天岳院はひどく立腹します。このエピソードからは、家老たちにとって天岳院は、まだ幼い藩主に代わり頼りにしたい存在であったことがうかがえると話されました。

こうした天岳院と息子・宗衍との関わりがわかる好史料を詳しく紹介されました。元文3年（1738）、40歳で死を前にした天岳院がまだ10歳の宗衍を案じ、奥女中に筆記させた「天岳院遺言書」（松江市・月照寺蔵）には、藩主としての日常生活から家臣の性質と見極め方、さらには京都から連れてきた奥女中たちの今後の事まで詳細に記されています。ここから、幼少藩主を養育する責任感とともに、母子の密接なつながりがうかがえると説明されました。

また、遺言書の最後には実家である伏見宮家への助力も頼んでいます。存命中は将軍家とのつながりを生かして御家の危機に力を発揮した天岳院ですが、明治以降は松江の人々から朝廷とのつながりが強調され、襲行列や京店の伝承が生まれていったのではないかと先生は説明されました。